第48号　50円
昭和52年5月25日

内　容

歴史の足音…… 1
正田建次郎先生の急逝を悼む…… 2
第34回理事会…… 3
開館十周年記念募金…… 4
千人会報告…… 5
昭和51年度年間業務報告…… 6
昭和51年度共同セミナー白書…… 7
私の大学生活とセミナー・ハウス 8
館長日記から……11
業務通信…10　利用状況…11～12

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
≪東京事務所≫
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京　(241)3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

歴史の足音

東京大学教養学部長
大森荘蔵

先日行われた東大の百年祭にはこれに強く反対する学生のグループがあった。駒場でそれらの諸君と長時間話し合ったことがある。そのとき強く感じたことは、それらの諸君が一種の「転落史観」とでもいうような視点からすべてを見ていること、またその史観を異常にまで強く確信していることであった。東大は明治以来権力の圧制機構の歯車であった、百年祭はそれを正当化し強化するものである、このままでは一路反動権力の犬に転落してゆくことは火を見るよりも明らかである、と。

私はもちろん東大なり東大の歴史を手ばなしで讃美するものでもなく、これら諸君の見方にも一面の真があるとは思っている。しかし、それはその一面を余りに単純に誇張し劇化したもので到底同意できないものである。だがそれはそれとして、過ぎ去りまた来るべき歴史の「意味付け」が如何に多種多様であるのかをあらためて痛感させられた。歴史の木目や條目を浮びあがらせる染色法は無数にあるようである。細胞の染色法が異なるにつれ或る構造が消えて別の構造が染め出される。それに似て、歴史を眺める人の観点次第で過去の歴史、そして特に未来の歴史は全く異なる相貌に染め出される。歴史の足音はまことに多様な響きをもっている。

歴史は百面相なのだ、と言っていえないことはなかろう。そしてその各々の面相はそれぞれそれなりの真実なのである。だといって、歴史観は全くの無政府状態で勝手放題というわけではない。或る程度の「検証」は可能なのだから。一つの歴史観は必ず未来に対する予想を含んでおり、その予想が事実実現するかしないかによってその歴史観は判定され合否の判決を受ける。だが、天気予報や勝馬予想ならその判定は容易だが歴史観ではそうでないことが多い。判定証拠となる歴史的事件そのものがまた多様な「意味付け」を受けるものだからである。表の意味のうしろに無数の裏の意味が可能なのである。また各種の言いわけがいつでもできる。トルーマンが大統領選挙で勝ち目がないと予想されていた。だが勝ってしまうと、なぜ負けるという予想に反して彼は勝ったか、という歴史的説明が行われることになる。歴史はケセラセラだと言いたくもなるのである。

トリストラム・シャンディ氏は自分の歴史を詳しく書こうとすれば一年かかっても一日分ができあがらないことを示した。だが実はただの一分間であっても、もしその「完全無欠な」歴史を書こうとするのならば何千年かかっても完成はしないだろう。π（パイ）の小数表現が終ることがないのと同じである。それは文字で「書く」ということの基本的制約なのである。書き、話すところの歴史は必然的に生きられた歴史の「編集」、それも途方もなく粗大な編集でしかありえないのである。だからこそ、一国の数百年にわたる歴史を数時間で「読み終える」ことができる、つまりその著者たる歴史家は数百数千頁で「書きあげる」のである。

数百年の時間を要した歴史を数時間で読むとき、「生きられたテンポ」と「読むテンポ」との違いはとてつもない。それは「生きる」ことと、「知り理解する」ことの基本的な違いなのである。ダルマ面壁の九年の歳月を理解するには一秒で事足りる。だが逆に言えば、一秒で事足りる程度の理解でしかない、ということなのだ。一つのメロディを想い出す、というとき一挙にそれを想い出すこともできる。「ああ、あの曲ならよく知っているよ」と言うような場合の想い出し方である。だがその曲を始めからその起伏強弱を追って想い出そうとするときは、それを沈黙の中で再演することになるだろう。そのときはその曲を歌い終えるのと同じ時間がその想起に必要なのではあるまいか。その式で、もしダルマの九年を「理解」しようとするならば、われわれもまた九年を費やすことになるだろう。

その式で歴史を理解することは全く不可能である。数億数十億の人間の数千年の歴史をその式で理解しようとするならばほとんど永久の命が必要であろうから。ではわれわれは地図の縮尺に似た時間の縮尺で歴史を理解しているのだろうか。そうではあるまい。「時間の縮尺」なるものはありえないと思われるからである。例えば一時間のお能の映画を一分間に早廻ししてみる。これをもって時間の縮尺というのであれば、そんな縮尺でわれわれが歴史を理解しているのでないことは全く明らかであろう。早廻しされた能の映画は能舞台とは似ても似つかぬものである。早廻しされたダルマの九年はもはや面壁九年ではない。百倍にスピードアップされたソナタはもはや音楽ではあるまい。

「その戦いは二〇年続いた」ということをわれわれが理解するのは単に「二〇年続いた」ということだけであって、その生きられた二〇年を理解したわけでもなく、

（2頁5段目へつづく）

理事長

正田建次郎先生の急逝を悼む

●弔辞

館長　飯田宗一郎

正田建次郎先生のご逝去は、私共にとって全くの驚きでありました。先生は病弱とか老衰とかいう肉体上の負い目を経験することなく社会的活動の真中に七五年の生涯を突如として終られました。生者必滅とはいえ、地上において再び先生の温顔に相見えることができないことは、なんとも淋しい限りであります。そしていまさらに惜しい人を亡くしたものであると、その急逝を痛く恨むとともに、先生のような俊英で、しかも温情に富む人と同じ時代に生きたことの幸運と恩恵に対し、感謝の念を新たにする次第であります。

私なりにうけとっている感じを申し述べることを許されるならば、先生は広い視野と健全な識見をそなえられた大学社会の聡明な知恵であられました。先生が残された数々の学問的、教育的業績とその貢献を思い起し、共感と親近感を深くするのも、先生を「わが党の士」であると信頼して、そのご指導を仰いできたからであります。先生は本質的に理性の人であられましたが、晩年は趣味の陶芸がいよいよ至芸の域に達し、その人間性に優雅さを加えて、けだし羨望に堪えないほどに独特の風格をつくられました。

先生は若くして抽象代数学の先駆的業績をもって先ず学者の地位をきずかれましたが、戦後は教育改革によって新制大学となった大阪大学の学長に就任し、国立大学の運営に参画され、さらに退官された後は武蔵大学の学長に招かれ私立大学経営の重責につかれました。このようにして先生はその時とその処において天分をおしみなく発揮され、豊富な体験を積まれました。

大学セミナー・ハウスは開館四年目の昭和43年4月に武蔵大学を協力会員校に迎えたので、先生は当法人の評議員になられました。ついで昭和46年6月には理事に選ばれ、やがて49年2月には推されて理事長に就任され今日に至りました。大学セミナー・ハウスは国公私立大学が共同して大学教育を行うことを目的としておりますから、国立と私立の両大学について豊富な経験を持たれ、かつ大学教育の実状について十分な知識を有する先生こそは、理事長として申し分のない資格を備えられていたというべきです。

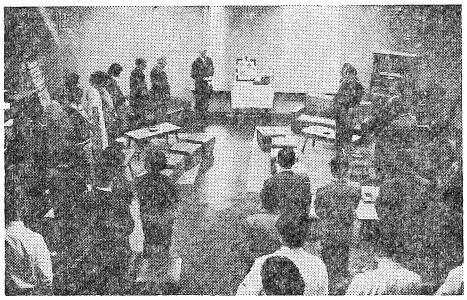
加うるに当法人創立以来今日に至るまで運命的かかわりを持っておられる茅誠司、山内恭彦両先生と、正田先生とはお互いにかけがえのない友人同士であります。当然の成り行きとして、両先生の推挙によって正田理事長は実現することに至りました。大器にして小事に忠実な正田理事長が大学セミナー・ハウスの発展と安定に寄与されたことを特筆して永く記憶しなければなりません。

「死は既知数」というが、3月10日には当法人の理事会が銀行クラブにおいて開かれ、先生は議長として本年度最後の議事を完了されました。そしてご逝去の直前四日の3月16日に私は午後の2時間を先生のご自宅において、たのしく談論いたしました。二年後に迎える先生の喜寿を祝うための数学セミナーのことや、目下先生を煩わしている二億円募金による二つの新しい建物のことなどを語り合ったことがどのような意味を持つのか、いまはそれを解くことができません。

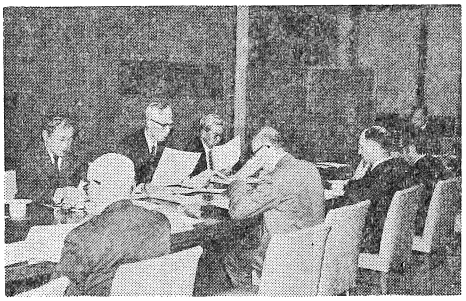
十年に満たない年月ではありましたが、正田先生から知遇をうけることができたことは、私にはこの上もない仕合せでありました。

処世上や自己内省について、先生はいつも人生の教師でありました。いまとなっては、先生が永く我々の心の中に生きて、なお語りかけて下さることを願うばかりであります。そして誇ることもなく、先生の如く生きて、自らの使命を完うしたいものと願うばかりであります。心から先生のご冥福をお祈り申し上げ、今生のお別れといたします。

（昭和52年3月29日）



当ハウス職員による正田理事長追悼会（3月31日本館ラウンジ）



理事長として最後の公式任務となった第34回理事会

（1頁よりつづく）

またその二〇年を数秒で早廻しに理解したわけでもない。だから一体、「生々しい歴史」などといったものはどこにあるのか、とも言いたくなるのである。

（第89回大学共同セミナー「人間はどこまで機械か」の指導教授）

◆大学セミナー・ハウスとの関係

昭和43年4月
武蔵大学が協力会員校となるに伴い、評議員となる。
昭和45年10月22日
開館五周年記念セミナー「学問における創造とは何か」で「観と勘」と題する全体講義を行う。
昭和46年6月
理事に選出される。
昭和47年11月18日
開館七周年記念会で乾杯の音頭をとる。
昭和49年2月
理事長に就任する。
昭和49年11月9日
故佐藤喜一郎氏追悼記念会で挨拶
昭和50年3月17日
『大学を開く』出版記念会で挨拶
昭和50年6月27日
大学院セミナー館落成・遠来荘移築完成を祝う会で挨拶
昭和50年11月1日
開館十周年記念会で挨拶
昭和51年10月23日
故大浜信泉先生追悼会で挨拶
昭和52年3月10日
第34回理事会で議長を務める。
昭和52年3月20日午後2時45分
旅先の足利市で永眠（75歳）。

●正田さんを偲ぶ

山内恭彦

大学セミナー・ハウスの理事長、正田建次郎さんが3月20日、突然病死された。全く予想もしなかった出来事なので、この報に接したときは、交通事故のようなアクシデントではないかと疑った。御当人にとっては、結構な最期であったかもしれないが、残された我々には、驚きと悲みに一瞬茫然として、急に世の中がからっぽになったように感じられる、大きなショックだった。

館長から、正田さんの学問的業績や、その人柄について記すように依頼されたのであるが、彼とのつきあいは、まことにプライベートで、学問について語り合ったこともなし、また教育や大学行政を論じたこともないので、御期待には十分添いかねる。学問のことは、学士院賞、文化勲章の栄に輝くといえばそれで十分であろう。その仕事は代数学に関するものであるが、中でも「代数系」の理論は、彼自身も得意なものであったらしい。残念ながら、専門違いで私にはこれを解説する能力がない。弱冠三一歳で大阪大学の教授に任ぜられたことからも、彼が学者として優れていたことと、早くから学界に認められていたことがうかがわれる。

一方彼は教育行政に関しても優れた手腕を発揮している。四七歳で理学部長、五二歳で学長という経歴は、彼が阪大の教授の間で、いかに信望が高かったかを示している。

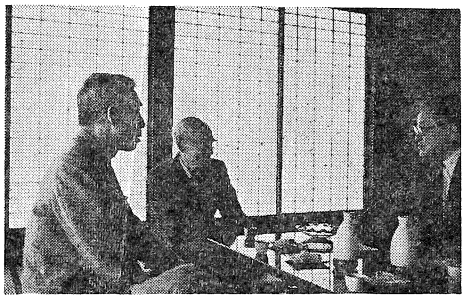
長岡半太郎先生の高遠な理想のもとに出発した新しい阪大に、天下の人材を集め、新学風を樹立し、その結果続々と目醒しい研究成果が挙ったのは、彼の学長としての指導力が、大いに貢献していることは疑いない。学長在任中彼の創案になる基礎工学部が退官後に設立されたとき、自ら学部長として、赤堀学長の下でこれを完成する責任を全うしたのも、美談として語り伝えてよかろう。

晩年は武蔵大学長、学園長として、同大学の発展のため尽力されると共に、いろいろの委員会のメンバーとして、また日本学士院の第二部長として、学問、教育のため忙しい日々を送られた。日本数学会で国際会議を開くときにも、彼はいつも欠かせぬ一役を買った。

このような多彩の活動にかかわらず、彼は世間的名声には全く無関心で、その生活はまことに地味であった。ただ、自ら求めることはないが、他人に頼まれればいやといわず、出来ることならこだわりなく引き受ける雅量をもっていた。そして、他人の美点を敏感に感知し、各人に十分その特徴をいかして働かせる才能を持っていた。阪大の諸氏から慈父のごとく慕われたのももっともである。

といっても、少なくとも外から見る限り、彼が努力してこういう境地に達した様子はない。天成よくできた人だったようである。だから、彼と話しているとコンプレックスを感じることが全然ない。誠につき合いよい人であった。それだけに、パーソナル・ヒストリーとしての興味ある話題には乏しい。あの春の日のような暖い心情は、接したものには終生忘れ難い思い出になるが、後世に伝えることは困難なのが残念である。

（当ハウス顧問・日本学士院会員）



遠来荘に歓あり（50年4月7日，右より正田，山内，飯田）

◈第34回理事会

①昭和51年度収支中間決算報告
②昭和52年度収支予算概要
③昭和52年度利用料金改訂
④協力会員校、日本大学の申出
⑤指定寄付取扱期間の延長申請
⑥事務機構の改組
⑦昭和52年度新規事業

▽昭和52年3月10日
▽丸の内　銀行クラブ

【出席者】正田建次郎、中村哲、戸田修三、沼田稲次郎、ヨゼフ・ピタウ、中島文雄、小山五郎、飯田宗一郎、海老沢義道（以上理事）、山田良之助（監事）、他に委任状による出席者一二名（敬称略）

◇

別記の諸議題について、専務理事の説明により一括可決承認された。

正田理事長は、「昭和51年度も諸物価の高騰、物件費、人件費等の支出増があったにもかかわらず、利用者と会員校の増加により、均衡のとれた決算となる見込みであり感謝に堪えない。新しい年度にも、施設の拡充や国際交流事業などが計画されており、決意を新たにしてセミナー・ハウス設立の目的を完遂したい」との総括報告をされた。

◇

●昭和52年度新規事業に補助金が内定

なお、昭和52年度新規事業として計画されている国際オリエンテーション・センターの建築費補助として、日本自転車振興会より、四、五三三万円、交友館建築費補助として、日本船舶振興会より一、〇四〇万円、さらに国際交流プログラム費補助として、日本万国博覧会記念協会より、二〇〇万円の補助金が内定したことも報告された。

例年の文部省補助金も、学生指導セミナー、普通セミナー合わせて、一、〇三八万円が内定している。

◈事務機構を改組

二部一室制となる

新年度より、当ハウスの事務機構が改組され、従来の事務局一室制から、二部一室制になる。

利用者に対するサービスの改善、館行事の充実、国際交流プログラムなど、拡大していく業務に対処するため改組されたものである。

新組織の業務分担は、次のようになる。

▽総務部（法人庶務、経理、施設営繕、環境整備）
▽事業部（渉外、業務、フロント・宿舎）
▽企画室（大学共同セミナーなどの教育活動プログラム、出版・広報、図書室）

ほかに募金事務局として東京事務所がある。

館長のもとに、左記三名が幹部会を構成する。

事業部長・理事　海老沢義道
企画室長代理・主事　飯田能子
総務部長代理　清水義久

開館十周年記念募金活発化
個人の協力にも期待

開館十周年記念事業として計画している国際オリエンテーション・センター、交友館の建設のための二億円募金は、経済不況のため、延期されていたが、昨年秋からの本格的活動により、ようやく活発化している。

すでに経済団体、会社からの申込確定額は約九千万円となった。

当ハウスが、開館十周年を期して、大学院と国際交流の二つの新しい分野を開拓する拠点として大学院セミナー館の完成に引続き、今年度中に更に新しい施設が拡充されることになり、開設以来の一連の建築計画もいよいよ終盤を迎えようとしている。

この二億円募金は、前記のごとく、会社等法人に協力を依頼するほか、そのうちの一、三〇〇万円は、個人募金として数多くのセミナー・ハウスを愛する個人有志に協力を依頼する予定である。

すでに応募された個人名を記して、初穂を捧げられた方々に謝意を表する。

♣開館十周年記念事業寄付金

三〇、〇〇〇円　三井銀行日比谷支店勤務　須賀輝昭殿
一〇〇、〇〇〇円　故堀米庸三先生夫人　堀米美代殿
五、〇〇〇円　当ハウス職員　飯田能子殿
三、〇〇〇円　東亜燃料工業㈱　大原洋司殿
五、〇〇〇円　当ハウス職員　伊藤清子殿
五、〇〇〇円　同　渡辺礼子殿
五、〇〇〇円　同　坂本光子殿
五、〇〇〇円　同　荒川孝子殿
五、〇〇〇円　青山学院大学教授　森田信義殿
五、〇〇〇円　女子栄養大学教授　吉川春寿殿
一〇、〇〇〇円　慶応義塾大学工学部　佐藤・川口ゼミナール殿
三、二八円　募金箱より
一〇、〇〇〇円　当ハウス元職員　岡治政信殿
三、〇〇〇円　東邦大学教授　吉田光孝殿
一〇、〇〇〇円　東京理科大学理工学部　大沢綱一郎教授ゼミナール殿
七、〇〇〇円　早稲田大学教育社会学　村田教授ゼミナール殿
五、〇〇〇円　東京都立大学教授　関口　晃殿
五、二〇〇円　滝野川教会　西田保殿

♠寄付金報告

（52年3月末現在）

＜一般寄付金＞
六八〇円　東京都立大学　ワークショップ殿
一、〇〇〇円　国学院大学　関野ゼミナール殿
二、〇〇〇円　東洋大学教授　本間　仁殿
三、〇〇〇円　東京理科大学　大沢ゼミナール殿
一、八〇〇円　募金箱より

＜植樹基金＞
一〇、〇〇〇円　郵政省簡易保険局　次席訓練受講者一同殿

＜指定寄付＞望遠鏡購入のために
六〇、〇〇〇円　第87回共同セミナー　指導教授一同殿
同セミナー参加者一同殿

＜現物寄付＞
京の北山杉　京都府京北町長　平岩祐夫殿

＜館長喜寿祝準備基金＞
三〇、〇〇〇円　NHK勤務　加藤辿・閑子夫妻殿

♦特別寄付金

＜火事見舞金＞
一〇〇、〇〇〇円　神奈川大学　小山教授・ゼミ学生一同殿
三、〇〇〇円　在日日本朝鮮人信用組合殿
三、〇〇〇円　多摩設計コンサルタント　鈴木　健殿
三、〇〇〇円　元当ハウス職員　河田喬夫殿
三、〇〇〇円　元当ハウス職員　桐生冨久殿
三、〇〇〇円　学生　年輪の会会員　松本昌子殿
三〇、〇〇〇円　当ハウス食堂社長　酢屋善元殿
五、〇〇〇円　国立音楽大学学生　西村陽子殿
一〇、〇〇〇円　東京女子大学図書課長　樋口美智恵殿

●寄贈図書

（52年1～2月）

「燕村の人間像」　小林歩三殿
「第三世代の学問」　エッソスタンダード石油広報部殿
「島根県仁多郡仁多町高田調査報告書」「明治大学社会学関係ゼミナール報告書」　船津隆一殿
「大学研究ノート」第24～26号　広島大学大学教育研究センター殿
「野外科学の可能性」　米山喜久治殿
「哲学を学ぶ人のために」「論理学のすすめ」「論理学の方法」「物と心」「言語・知覚・世界」「講座哲学2」　大森荘蔵殿
「ウィトゲンシュタイン全集6」
「講座心理学14」　今村護郎殿
「採集と飼育」2月号　日本科学協会殿
「核時代の平和像」　川田　侃殿
「ニヒリズム」「哲学入門以前」　川原栄峰殿
「国際関係論の基本問題」　板垣與一殿
「工学院大学研究報告」第39～41号　工学院大学図書館殿
「西欧精神の探究」　木村尚三郎殿
「早稲田フォーラム」No.16　早稲田大学殿
「クェーカーの信仰に生きた人々」　飯田宗一郎殿
「生活学」第一～二冊、「民具と生活」　小川信子殿
「腰折れ百首と詩十篇」　斎藤　勇殿
「戦中と戦後の間」　丸山真男殿
「今昔物語集人名人物総索引」　彦由一太殿
「現代物理学をつくった人びと」　柴垣和三雄殿
「国際交流」12　国際交流基金殿
「逆説のアジア」　中嶋嶺雄殿

♥京の〝北山杉〟の寄贈
京都府立ゼミナール・ハウス完成を記念して

昭和51年7月に開館した京都府立ゼミナール・ハウスの所在地、京北町は、数年前より再三、当ハウスを訪問して構想を練っていたが、昨年7月に完成、披露パーティを開催した。

去る2月8日、京北町の平岩祐夫町長が謝意をこめて当ハウスを訪問、遠路わざわざ京北町の木〝北山杉〟の苗木を持参、寄贈された。

食堂から出合いの丘へと橋を渡り終った左側に、記念植樹をした。やがて大木となって景観を増すことであろう。

千人会＝会員増加運動……第八報＝昭和52年2～3月

◇千人会会員からのたより◇

箱根の会以来、十何年の年月、夢のようです。もちろんあの時から今日のご隆昌を期しておりましたが、感涙にむせばざるをえません。そのうちぜひお伺いしたいと存じますが、老人の出不精あしからずお許し下さい。

東京都立大学名誉教授　五唐　勝

▽△

毎年美しいカードをありがとう存じます。今年も学生とうかがわせていただくのを楽しみにしております。

鶴見大学教授　井村君江

▽△

本年5月も昨年につづき計測自動制御学会の催しで二泊お世話になります。

上智大学教授　市川邦彦

◇現在会員は一、三八七名です

大学人＝一、〇九七名
社会人＝　二九〇名
（52年3月31日現在）

◇新しく会員となられた方々

18名〔第37回報告（申込順）〕

C　電気通信大学助教授　中田良平殿
C　電気通信大教授　大泉充郎殿
C　電気通信大学助教授　岩崎不二子殿
C　千葉大学講師　石川達雄殿
C　電気通信大学助教授　小菅敏夫殿
C　東京都立大学助教授　水谷三公殿
B　お茶の水女子大学助手　和田恒代殿
B　お茶の水女子大学助教授　本田和子殿
B　東京都立大学助教授　秋間　実殿
C　三菱信託銀行本店勤務　中西久美子殿
B　お茶の水女子大学教授　松田千鶴子殿
B　お茶の水女子大学教授　矢部章彦殿
C　東京都立大教授　石村善助殿
B　東京都立大教授　詫摩武俊殿
C　早稲田大学外事課長　山代昌希殿
C　東京医科歯科大学教授　島薗安雄殿
C　東京医科歯科大学助教授　高山昇二郎殿
B　東京医科大学講師　高木健太郎殿

◇会費ありがとうございます

昭和52年2～3月
（敬称略）

飯田修一、村井孝子、谷資信、斎藤勇、西村章子、吉田耕作、昌谷春海、稲毛卓御遺族、渡辺忠市、吉川春寿、磯野修、石井正博、島田征夫、柳澤富雄、板橋並治、久世寛信、平岡勇、吉田修三、石田孝夫、金子ハルオ、松崎奈岐、福島彬夫、岡田純一、新保清子、山崎俊雄、中島力、岡田清、遠藤平治、今井清一、遠藤一郎、矢田俊文、光延明洋、西田貴子、伊藤千秋、中岡二郎、小山弘志、最上武雄、吉阪隆正、樫崎彰男、斎藤真、松本武子、原田敬一、藤巻正生、蓮見音彦、窪田庄十郎、猪瀬博、井原恵治、吉田公保、近藤圭一、松島千代野、越智昇、小林望、若山邦紘、浦上要三、子安宣邦、大岡信、佐藤頌子、力石誠之助、三神勲、黒沼稔、内藤博、高松正昭、山口俊夫、馬越徹、古崎愛子、堀内睦子、久保亮五、山口貞雄、松野賢吾、守永誠治、所司真理子、足立美比古、若林玄修、西川恭治、中島徹、一丸節夫、寺中良二、磯直道、南美枝子、桜井育子、井村君江、富塚文太郎、瀬部孝、中村孝之、豊田陽子、増沢利幸、牛島忠広、中田良平、永野賢、平野鉄太郎、梅村魁、永井道雄、松田正一、門脇卓爾、肥前栄一、中村妙子、緒田原涓一、杉山逸男、早坂泰次郎、大友賢二、岡村勝、五唐勝、村井実、遠藤卓夫、原芳男、島美喜子、一松信、人見宏、岡野行秀、村松林太郎、佐藤宗彌、小原啓義、斎藤幸一郎、那須宗一、土井恵美子、伊藤満、萩原稔、大西清、佐藤毅、市川邦彦、谷口汎邦、細井勉、土居健郎、白川和雄、山田良之助、島田治夫、北村宗彬、松尾弘、伊藤卓爾、吉沢四郎、柴田泰比古、梶谷尚、小島慶三、石原忠男、朝永振一郎、河田喬夫、瀬川美能留、小倉芳彦、池原義郎、村田晴夫、春田素夫、福田一郎、須藤秀治、守屋美賀雄、土橋信男、向坊隆、上野一、佐藤直子、小林弘、三上次男、大泉充郎、中西久美子、小山五郎、近藤薫樹、大島太郎、木田宏、東洋、丸山真男、手塚喬介、瀬在良男、高瀬文志郎、鵜川馨、大田未穂、護雅夫、大畑篤四郎、島田依史子、池田義人、栗原俊記、田所光子、石渡毅、福西基、石渡巌、工藤英明、大塚正夫、佐古純一郎、渡利千波、加藤寛、佐藤和男、浅野弥祐、小泉文夫、佐藤慶幸、鈴木友二、笠耐、志賀英、井出翁、勢山秀子、新澤雄一、浮田久子、藤永鉄雄、吉田裕、石川達雄、下川浩一、野澤晨、海老沢義道、柘植敏治、荒川孝子、箕輪成男、樋口美智恵、原一雄、秋山虔、正田建次郎、大倉謙二、小泉一郎、浦野伊和子

昭和51年度千人会入会状況

会員校	111
東京	10
一橋	1
東京学芸	7
東京医科	3
歯科	2
東京農工	5
電気通信	4
お茶の水女子	3
東京外語	6
東京都立	13
早稲田	3
日本女子	13
慶応義塾	9
明治	2
中央	1
青山学院	4
法政	1
立教	5
東京女子	
明治学院	1
津田塾	1
上智	1
東京理科	1
東京経済	1
東洋	1
東京家政	1
学院	
学習院	2
成城	1
工学院	2
聖心女子	1
東海	2
鶴見	1
駒沢	2
東京薬科	1
非会員校	18
その他	37
合計	166

第三回共同セミナー委員会

昭和52年3月14日／18時～20時半／於・私学会館

年度最後の委員会は、学期末の所用で多忙な時期にもかかわらず、別記の10名が出席され、次の議事に沿って活発な話し合いが行われた。

(1)第89回共同セミナー実施報告
(2)昭和51年度共同セミナー全七回の総括
(3)昭和52年度共同セミナーの年間計画
(4)共同セミナーの規模および参加経費
(5)共同セミナーの生活上の問題点
(6)委員の任期満了に伴う半数改選について

中心的な議題は(3)年間計画で、前回で提案されたテーマを確認し若干の修正・変更を行い、第1・四半期と第2・四半期の一部が決定した。

また、共同セミナーの予算に関連して、セミナーの規模と経費について企画室案が説明され、学生の参加経費を六、〇〇〇円とすることが承認された。

【出席委員】（敬称略）

岡宏子、宇野重昭、関口晃、江沢洋、小沢重男、勝見允行、青木生子、荒川幾男、山岸健、野田春彦

昭和51年度年間業務報告

宿泊延人員四〇万人を突破

早稲田大学、利用延人数で第一位

昭和51年度も、昨年度にひきつづき数々の新記録を作り、無事終ることができた。

第一に、開館以来の宿泊延人数が、9月16日に四〇万人を突破し年度の終りには四二万三、五一八人に達したこと。

第二は、年間宿泊延人数が、四万七、六三一人、宿泊実人数二万八、三二三人、ゼミ回数一、〇二六回といずれも開館以来の新記録であったこと。特にゼミ回数が一千回を越えたのは、開館以来初めてであった。

第三に、協力会員校は51年度中に五〇校を突破、現在五一大学となったこと。

第四に、年間利用ゼミ回数で、早稲田大学と東京大学の二校が六〇回を越えたこと。

特に、開館十一年目の9月に、宿泊延人数が四〇万人を突破したことは、特筆すべきことで、一〇〇万人を記念するまでには今後の施設の拡充を考えあわせると、あと一〇年位の見込みとなる。

開館二十年の記念の年に、一〇〇万人に到着することを目標にしたいものである。

利用者全体の四七%を占める会員校の利用状況をみると、利用ゼミ回数において四年連続トップであった東京都立大学にかわって早稲田大学と東京大学が一、二位に躍り出た。都立大が特に減少したというよりも、早大が六五回、東大の六二回と、いずれも六〇回を越えていることによる。宿泊延人数では、早大が連続トップとなり、一、七八六人と前年度より一一五名多く、これも新記録であった。

なお、ゼミ回数、宿泊延人数共に、上位四校は同じ大学で占められているが、五、六位が入れかわり、今回はじめて東京学芸大学が五位に、中央大学が六位になっている。ちなみに、開館以来、年間ゼミ回数のトップにランクされた回数は、都立大が9回、早大が2回、慶大が1回となっている。

次に、この一年間、学生たちのためにゼミでよく利用された先生方のお名前と利用回数を記して、その教育愛に敬意を表したい。

▽4回＝見田宗介（東大）、関田寛雄（青学大）、大沢綱一郎（東京理科大）、小山吉之助（神奈川大）、近江政雄（東工大）

▽3回＝松田武彦（東工大）、竹内与之助（東外大）、川原栄峰（早大）、西宮輝明（早大）、島田征夫（早大）、亀山三郎（中大）、公文博（法大）、増田茂樹（明学大）、色川大吉（東経大）、橋口英俊（東京家政大）、田村皖司（杉野女子大）、和田明子（都留文科大）

▽△

さらに、ゼミ回数による構成比をみると、

会員校	67%
非会員校	11%
教育団体	10%
経済団体	10%

となっており、わが国の大学社会の中に、一つの大学共同体が育ったことを示している。

さらに、当ハウスではゼミの効果からみて、二泊三日を原則としているが、宿泊延人数による宿泊数を百分比でみると、次のようになっている。

1泊	3泊	5泊以上	4泊	2泊
32%	15%	10%	6%	37%

▲第92回大学共同セミナー予告▼

主題＝日本にとって国連とは何か　期日＝昭和52年6月24～26日

＜全体講義＞ 国連の研究―私にとっての国連　前東京大学教授・上智大学教授　高野雄一氏

＜ゲスト講演＞ 国際連合システム論―国際連合の本質と現実―　前国連大使　斎藤鎮男氏

＜セクション指導＞ 内田久司（東大教授）、高林秀雄（龍谷大教授）、大塚博比古（元国際原子力機関法律部長）、斎藤恵彦（東外大教授）、横田洋三（ICU準教授）の諸氏

〔表 1〕 月別利用状況

（　）内は前年度数

月	ゼミ回数	宿泊延人数(人)	定員比(%)
4	101	4,030 (4,095)	56
5	75	3,926 (3,344)	53
6	62	3,370 (3,369)	52
7	109	5,492 (5,777)	74
8	76	4,653 (4,812)	63
9	110	4,345 (3,395)	67
10	96	4,228 (4,000)	57
11	82	4,415 (3,057)	61
12	93	3,228 (3,540)	48
1	60	2,188 (3,123)	35
2	87	3,766 (3,026)	56
3	75	3,990 (3,759)	54
計	1,026	47,631(45,297)	57
月平均	86	3,969 (3,775)	57
1日平均	3	136 (129)	

〔表 2〕 利用者別宿泊人数・ゼミ回数

（　）内は前年度

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	率(%)	1団体実平均人数
会員校	690(636)	67	22,351(18,620)	47	21
非会員校	114(114)	11	6,618(7,516)	14	42
大学連合	20(16)	2	2,520(2,082)	5	66
会・教育団体	99(123)	10	9,498(10,895)	20	42
企業・経済団体	103(103)	10	6,385(5,885)	13	34
個人	—	—	259(299)	1	—
合計	1,026(992)	100	47,631(45,297)	100	28

〔表 3〕 会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数
1	早稲田大学	65	1	早稲田大学	1,786
2	東京大学	62	2	東京大学	1,685
3	東京都立大学	54	3	東京都立大学	1,515
4	法政大学	39	4	法政大学	1,489
5	東京学芸大学	30	5	東京学芸大学	1,149
6	慶応義塾大学	29	6	中央大学	919
6	中央大学	29	7	慶応義塾大学	908
7	明治大学	28	8	明治大学	745
8	明治学院大学	23	9	立教大学	716
9	工学院大学	18	10	上智大	596
10	立教大学	17			

昭和51年度　大学共同セミナー白書

昭和51年度は前年度同様七回の大学共同セミナーが開催され、参加者総数六八〇名で、各回平均はわずかに一〇〇名を下廻ったが（前年度一〇一名）、うち五回は一二〇名を超える応募者があり、極めて盛況であった。

表2③は参加学生の専門分野を所属学科でみたものであるが、理科系の学生が前年度比で倍増となったことが注目される。第87回と89回の理科系学生の実数は53名と43名であるが、これは参加者数の構成比ではそれぞれ全体の59％と41％に当たり、従来、共同セミナーが人文系と社会系の学生で参加者を二分していたことを考えると、特異な現象といえよう。好ましい傾向である。

参加者数を大学別にみると、表2①に示すように70校にのぼっており、前年度に比して国立大学の数が4校増加し、それに伴って参加者数も31名増加しており、私立大学の参加者数が56名減少したことと対照的である。また、私立大学においては女子が26名ほど男子を上廻っており、全体としてみても3名、2％女子が増加しているのが特徴である。

次に学年別でみると、表2②のように三年生が最も多く30％を占め、前年度と変わらないが、四年生にかわって二年生の参加が次に多いことと、一年生の参加がほぼ倍増したことが目立った傾向である。

〔表 1〕　大学共同セミナー開催状況

回　数	会　期	主　　題	参加人員
第1回（No. 83）	51年 5月28日～30日	日本土着思想の原点（新入生歓迎セミナー）	106名（32校）
第2回（No. 84）	6月18日～20日	神話・文学・聖書―西洋古典の人間理解―	109名（28校）
第3回（No. 85）	10月8日～10日	「アメリカ」―現代文明の試練―独立200年の理想と現実―	104名（27校）
第4回（No. 86）	10月22日～24日	古代東アジア史上の日本（大浜信泉先生追悼）	58名（17校）
第5回（No. 87）	11月12日～14日	宇宙―現代宇宙像の諸問題―	90名（34校）
第6回（No. 88）	12月3日～5日	西欧精神の源流（堀米庸三先生追悼）	107名（32校）
第7回（No. 89）	52年 1月14日～16日	人間はどこまで機械か―物質・生命・精神―	106名（34校）

〔表 2〕　大学共同セミナー参加状況

【①大学別参加者数】　（　）内は内数で女子

＜国立大学＞		
茨城	3	
筑波	48	(24)
群馬	1	
埼玉	1	
千葉	3	
東京	59	(6)
東京医科歯科	12	(1)
東京外国語	29	(11)
東京学芸	5	(3)
東京農工	3	
東京教育	2	(2)
東京工業	14	
お茶の水女子	16	(16)
電気通信	4	
一橋	5	
横浜国立	4	
山梨	1	
静岡	1	
名古屋	3	
京都	1	
奈良女子	2	(2)
小計（21校）	217	(65)
＜公立大学＞		
東京都立	10	(5)
横浜市立	1	(1)
都留文科	8	(6)
小計（3校）	19	(12)
＜私立大学＞		
跡見学園女子	7	(7)
独協	13	(1)
青山学院	13	(9)
大妻女子	1	(1)
学習院	6	(5)
杏林	1	
慶応義塾	44	(11)
学院	7	(1)
国際基督教	32	(16)
駒沢	5	(3)
上智	8	(5)
女子栄養	2	(2)
成蹊	12	(4)
聖心女子	25	(25)
清泉女子	1	(1)
専修	1	
大正	4	
玉川	2	
中央	13	(4)
津田塾	38	(38)
東海	1	(1)
東京経済	3	
東京女子	29	(29)
東京造形	1	
東京農業	1	
東京理科	6	(3)
東洋	2	(1)
二松学舎	11	(2)
日本	3	(1)
日本女子	10	(10)
法政	3	
武蔵	2	(2)
武蔵工業	4	
明治	11	(1)
明治学院	4	(3)
明星	3	(3)
立教	14	(10)
立正	3	(3)
和光	1	
早稲田	68	(16)
フェリス女学院	3	(3)
同志社	2	
同志社女子	4	(4)
立命館	1	
小計（45校）	432	(229)
＜短期大学＞		
駒沢短期	1	(1)
小計（1校）	1	(1)
その他	11	(4)
計　69 大学	668	(306)
計　1 短大	1	(1)
計　その他	11	(4)
合計	680	(311)

【②学年別・男女別】

区　分	男	女	計	比率（%）
1年	68	48	116	17.1
2年	90	74	164	24.1
3年	97	111	208	30.6
4年	64	52	116	17.1
大学院	43	22	65	9.5
その他	7	4	11	1.6
合計	369	311	680	100.0

【③学科別参加者数】（　）内は内数で女子

学　科	合　計	比　率（%）	
文学	132 (86)	19.4	54.8
史学	61 (37)	9.0	
哲学	38 (15)	5.6	
教育学	37 (25)	5.4	
芸術	9 (7)	1.3	
教養	18 (3)	2.6	
その他の人文科学系学科	78 (39)	11.5	
法学・政治学	68 (14)	10.0	24.5
商学・経済学	30 (4)	4.4	
社会学	35 (24)	5.2	
国際関係学	16 (16)	2.4	
その他の社会科学系学科	17 (6)	2.5	
理学	54 (20)	7.9	18.2
工学	40	5.9	
農学	5	0.7	
医学・歯学・薬学	25 (5)	3.7	
家政	6 (6)	0.9	0.9
短大・その他	11 (4)	1.6	1.6
合計	680(311)	100.0	100.0

私の大学生活と大学セミナー・ハウス

卒業に際して一言

三つの壁をうち破ってくれた場

和田昭穂

私はこの春大学を卒業し4月からは新聞記者の卵として社会人生活のスタートを切った。今、五年間の学生生活（一年間留年）を振り返ってみると、そのなかで大学セミナー・ハウスが幾度も大切な活動の場を提供してくれたことに気づく。

私が初めてセミナー・ハウスを利用したのは48年夏であり、それ以来、通算八回、約二〇泊をここで過ごした。ハウスの常連というには程遠いとしても、かなり良く利用した部類に入るだろうと思う。

利用内容を見ると、八回のうち二回は日米学生交流の場である日米学生会議の出席者として（48年と50年夏）、三回は、私の学科（東大教養学科）が毎春開いている通称「卒論合宿」に参加するため（50、51、52年3月）、一回はハウス主催の第82回大学共同セミナー「革新的伝統の追究」の参加学生として（51年1月）、そしてあとの二回は、セミナー・ハウスのご好意で参加させて頂いた二つの国際交流プログラム――クリス・ローソン氏（英国ウッドブルック・カレッジ教授）を招いて50年9月に催された「英国を語る夕べ」、および51年9月に開かれたユネスコ・アジア地域研修コース参加者歓迎会――の際である。このように見てくると、利用の仕方も結構多様だったようだ。

私にとっての大学セミナー・ハウスとは一言でいうならば、様々な意味で「壁を破ってくれる場」であった。

その壁のまず第一は、大学・専門分野間の障壁である。日常の学園生活では、いつも同一の大学、それも同一専門分野の先生方や学生とばかり接触することになりがちで、知らないうちに視野が狭くなってしまう恐れがある。セミナー・ハウスで他大学の先生の講義を聴いたり、様々な専攻の学生と交流したことは、単に知的刺激となったのみならず、このような〝視野狭窄症〟を予防し自分自身の世界を広げるという点でも意味があった。

第二には、いわば「師弟」の間の壁である。実は私達は、自分の大学の先生方とさえも、通常の授業時間の枠の中では十分に懇親する機会がないというのが現状だ。ときにはセミナー・ハウスのような場所で、普段一方通行の講義の場しか接触のチャンスのない先生方とじっくり話をしてみたい、というのはかなり多くの学生がもっている希望だろう。私は先に挙げた「卒論合宿」において、日頃学校では挨拶を交わすだけの先生と初めてゆっくり話をさせていただいたという経験があるが、このような教官との交流は通常の講義に劣らぬ「学習」の機会だったという気がする。

第三は、いわば国境・文化の壁である。私は、幸いセミナー・ハウスを外国人と一緒に利用する機会に恵まれた。特に日米学生会議においては、米国人学生と数週間にわたり寝食を共にしたわけであり、自ら異文化接触のモルモットとなることができた。単なる一方的な「接待」ではない、正しい相互認識に基づく国際交流の重要性と難しさを、自分自身の体験を通じて感じとることができたのは大きな収穫だった。

このように考えてくると、実は、ここで挙げた三つの壁はいずれも今日のわが国大学制度の欠陥として指摘されている諸問題に重なり合うものであることがわかる。日本の大学の閉鎖性は単位互換制度の遅れなどに端的に現われているし、一方、教官と学生の間の交流の欠如はマスプロ教育、マスプロ大学の産み出したものであるといえる。また、日本の大学、それも特に国立大学の国際化という面での立ち遅れは、つとに指摘されていることだ。

大学セミナー・ハウスの意義は、つまるところ、日本の大学制度のこのような「後進的」側面を補完することにあると考えられる。たとえていえば、風通しの悪い建物の通風口の機能を果たしているようなものだろう。私は、大学セミナー・ハウスの成功が刺激となって、今後は、従来利用する側にあった大学そのものが変貌すること、すなわち先に挙げたような後進性の克服が推進されることを期待している。少なくとも、大学セミナー・ハウスという便利な施設があるばかりに、かえって大学側の改革が遅れてしまうというようなことは決してあってほしくない。

いわゆる勤め人になってしまった自分が今後ふたたびセミナー・ハウスを利用することがあるかどうかは定かでない。しかし、ここで貴重な成長の機会を与えていただいた者として、これからも是非セミナー・ハウスの発展は見守って行きたいし、できることならまたいつの日かもう一度あの楽しい雰囲気を味わうことができたらと思っている。最後になったが、幾度もお世話になったスタッフの方方に心からお礼を申し上げたい。

（東京大学教養学科卒）

ゼミ学習を支えてくれた環境

金香陽子

初めて大学セミナー・ハウスを訪れたのは、大学に入学してまだ二ヵ月もしない初夏の頃でした。輝く木々の緑と新しい友人達に囲まれて、これから始まる大学生活に希望にみちあふれていた時でした。その時に見た「生活は簡素に、思想は高潔に」の食堂の文字がとても強く印象に残ったのを覚えています。それから四年、卒業を間近に控えた春まだ浅い季節にここを訪れ、偶然にも心暖まる交歓会で卒業祝をしていただいて、また新しい出発を感じています。

四年の間には何度か利用させていただきましたが、自然の中での行きとどいた環境をみるたびに、学習にこんな最適な所はないと感じます。ここでの学習は、大学生活において忘れられないものとなりました。

週に一度のゼミナールでは果たせないゼミの人々との交流も大切な思い出となりました。宿舎村内では、規則として飲酒は固く禁じられている、とありますが、節度があれば人間交流の円滑油として許されていい場合もあるのではないでしょうか。

また、少々残念だったのは、図書館や野外劇場、テニスコート等のいろいろなすばらしい施設を利

用する機会がなかったことです。

都会の大学の貧困な施設を補うものとして、東京近郊にこのような施設をつくり、育てて下さった方々には感謝するばかりです。その高い理想を我々も受け継いで、それぞれの目的に向かい前進して行くことができれば、と思っています。

（東京都立大学法学部卒）

本拠地を求めて

弓削　愛一郎

12時を過ぎると、私達の研究室では全員が弁当をあるいはパンを持って一室に集まります。教官・学生が昼食を共にしながら、意味のある雑談をするというこの習慣は、長い間続いていると聞いています。卒業後もこの雑談が忘れられずに〝アモルファス〟という会を作り、毎年夏になると多くの卒業生が集まり、テーマを持って三日間語り合ってきました。人数の少なかった以前はよかったのですが、会員の多くなったここ数年、私達の囲りには討論をするという機会が少ないためか、どうしてもそのための良い場所が見つからず苦労していました。昨年の夏、初めて大学セミナー・ハウスを利用してみて、ようやく私達アモルファスにも本拠地ができたように思われます。昨夏の討論のすぐ後、セミナー・ハウスでの少人数討論の希望が出され、今年2月に教官・学生八名の討論会が持てました。心のこもったゆき届いた設備の中では、まだまだ春の遠い八王子の風も心地良く感ぜられます。もう少し話そう、もう少しと夜遅くまで討論が続き、部屋に戻った後も迷惑とは思いながらも先生方を起こして語り合いました。三日間の討論が終わってみるとさすがに疲れましたが、疲れた分だけやったんだという充実したものを感じることができました。

日曜日に開いていただいた交歓会では、他の大学の先生、全く分野の違う人達とも話すことができ、とん汁を食べながらのあの雰囲気、飯田先生からいただいた記念の絵葉書、みんなで歌った〝若者たち〟など、忘れられないことばかりです。帰る間際に、いろり端でフーフーいって食べた焼きイモも忘れられません。

大学生活最後に、充実した討論ができ、またあのように楽しい思い出が作れたことを飯田先生はじめセミナー・ハウスの皆様に感謝しております。

（千葉大学理学部卒）

交歓会の感動

寺田　かをり

大学セミナー・ハウスに三回目の足を運んだのは2月19日午後7時過ぎ。今まではいつも仲間といっしょでしたからまわりの人についていけばもうセミナー・ハウスに着いていましたが、19日は就職先における内定者の事前研修を兼ねているアルバイトのため5時に仕事を終えて神田からひとり八王子に向かいました。

大学を卒業して社会に出たら、まわりの人についていくだけではいけない。自分で方向を決め自分で切り開いていかなければならない。そんな意味で、今回のセミナー・ハウス行きは、これからの新しい生活の道しるべのような気がしました。

偶然三回目にして他の大学との交流親睦昼食会に参加することができました。ここで、卒業予定者は館長の握手とみんなのあたたかい拍手をいただきました。いままで卒業するなんて信じられなかったけれど席に着いた時卒業なんだなあとつくづく感じしんみりした涙っぽい自分に気づきました。人間善意あるあたたかい行為には、それがたとえ一面識しかなくとも、一秒しか見合わなくともそれに感動し新しい希望を持つことができるのだと考えさせられた一日でした。

（法政大学法学部卒）

八王子ショック

有末　賢

大学共同セミナーへの参加は、私にとって一種の「スプリング・ボード」の役割を果たしたように思う。私が参加したのは、第82回の「革新的伝統の追究」と第83回の「日本土着思想の原点」の二回であったが、その二回の中に、私自身の人間・社会・学問への根本的問いかけと展開があったように思われるのである。

まず、最初の共同セミナーでは、「思想の冒険」グループの先生方の「生き様としての学問」という個性の前では、我々学生は、あまりにも無個性な、亜流モダニズム的な存在でしかないことを痛感した次第であった。共同体の革新的再生や常民の学問の確立は、ただ口先だけで、従来の日本人がモダニズムを模倣してきたように唱えていても達成されるわけではない。そこには、自己の生き方への根源的批判や自己否定の契機が含まれていなければならない、ということを示してくれたのかもしれない。

しかし、このある意味では重たい「八王子ショック」から、自分の中に「創造への芽」を見出すきっかけが得られたとも言える。次の第83回共同セミナーでは、テーマの関連もあって引き続いて参加し、そこでのメンバーとは、今でも自主ゼミが続いている。未熟で堂々めぐり的な議論が多いが、それでも既成の学問枠組にとらわれない、民衆の自立のための学問をめざそうという姿勢においては人後に落ちないつもりである。大学生活四年間をふりかえって、私にとっては自分自身の「存在の基盤」「アイデンティティー」を確立することが課題だったように思うのだが、その課題はこれからもまだまだ続くものであり、確立することなど不可能なことなのかもしれない。しかし、大学共同セミナーの経験は、その存在の基盤を文字どおり「大いに学ぶ」べき大学へ方向づけたような気がする。そして、存在基盤を大学共同セミナーだけに止めず、地域共同体へと展開させていくことこそが、これからの我々の課題であるように思う。

（慶応義塾大学法学部卒）

▼新しい絵葉書（カラー）を発売

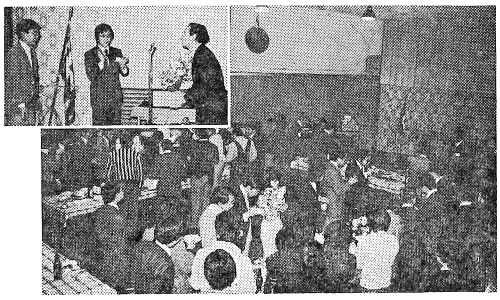
……四枚一組で一〇〇円です……

開館して十二年目、セミナーの丘はたくさんの記念樹が大きくなり、それが周囲の雑木林ととけ合って美しい緑の丘になった。年毎に増築した建物が加わって緑の丘を一層美しくしている。五年ぶりに改めて作成された新しい絵葉書は、航空写真の全景、楔型が空に拡がる本館、雑木林から見た講堂、ユニット・ハウスと長期研修館――いずれもカラーが鮮やかで好評である。新しいデザインの特製封筒も用意された。当ハウスの紹介に、また、かつてこの丘で生活をともにした方やお知りあいの方々へのお便りなどに是非ご利下さい。

●業務通信

セミナーの丘は「友情をつくる丘」といわれる。立教大学の三戸ゼミナールがつくった十五年の友情の歴史を紹介したい。

3月中旬、三戸ゼミナール十五周年記念会という集会が行われた。当ハウスでは二五回にわたってゼミを実施された立大経済学部・三戸公教授と、過去十五年間同ゼミを巣立った社会人、現役約百名の心暖まるリユニオン・ゼミであった。今はそれぞれ異なる分野で働く各期の卒業生の報告、討論そして交歓プログラムの中で、恩師を軸とする縦と横の人間交流、情報交換がくりひろげられていた。



立大・三戸ゼミ15周年記念パーティ(上は記念品を受ける三戸教授)

▽……△

2・3月には卒業を前に、教師と学生がいま一度この丘で合宿し、卒業研究の成果と苦労を分かち、惜別の思いのうちに交りを深めたグループが少なくない。東大教養学科自治会による「卒論合宿」や芝浦工大建築工学科の「卒業研究発表会」などは、いずれも多彩なテーマの卒業研究の概要の発表や討論が行われていたが、三年生はじめ他学年の参加もあり、ここでも日頃十分には得られない縦と横の交流と親睦が深められていた。千葉大理学部・井上勝也教授から寄せられた手紙の中にも、「おかげで、予想以上の充実した議論を重ねることができました。朝からほとんどお茶を飲む時間を除いて連続してやりましたので、いささかくたびれましたが、第二夜目には学生達が宿舎にやって来て雑談をしたいといい、午前3時まであれやこれや語り続けました」とあり、師弟の密度の高い交りの一端をうかがうことができた。

▽……△

各大学の利用の中には第二部(夜間)のゼミ・グループのあったことも紹介したい。3月中旬、修復なった第二セミナー室の使い初めをした神奈川大・小山ゼミや明学大・新田ゼミなど。それぞれの職場で一日の勤務を終えた学生が当ハウスに参集するのは、夕食後の7時から8時になる。土曜日休暇をとると、金曜日の夜から日曜日にかけてここで二泊三日を過ごすことができる。2月中旬都立大・清水ゼミに参加した有野嘉弘君も夜学生のひとりであるが、今春卒業にあたって、次のような感想を寄せた。「私は在学中、四回お世話になりましたが、その都度、もう少し長くいたいなあと思ったものです。特に私は、夜学生でしたので、空気の澄んだ、広々とした施設内のセミナー室に差し込む日差しの中での学習に、改めて〝大学生活の喜び〟を味わったものです。」

▽……△

会員校が教職員の諸集会に当ハウスを利用され、日頃関係の深い方々とこの丘でお会いできるのは嬉しいことである。3月17・18日には国際基督教大・宗務委員会が教職員の修養会に、また、同28～30日には東京女子大・法人事務局が新規採用事務職員の研修に当ハウスの諸施設を活用され、飯田館長もお茶の会に、あるいは夕食会に出席して親交を深めた。

▼2・3月交歓プログラム寸描

2月3日＝節分の夜は四グループ一三二名が宿泊。夕食時の食堂では年男の明大三年山口君が元気いっぱい「福はウチ、鬼はソト」。

2月9日＝多摩の丘の野趣を味わってもらいたいという館長の提唱で、キャンプファイア場にたき火が用意され、在泊者三グループ五九名が焼芋のおやつを楽しむ。

2月10日＝夕食時の交歓会に九グループ一六〇名。K・リーゼンフーバー上智大助教授が流ちょうな日本語で感話。この日のハイライトは明学大グリークラブの合唱と輪唱の指導。

2月20日＝日曜の昼食会に七グループ一一六名が参加。清水誠都立大教授スピーチ。今春卒業予定の学生三二名に井上勝也千葉大教授からはなむけの言葉が、飯田館長からは記念品の絵葉書セットが一人一人に贈られた。

3月14日＝七グループ一六五名が夕食時の交歓会に。小林弘東京学芸大教授スピーチ。青山学院大(理工学部聖歌隊)、成蹊大、和光大各グループの合唱。

3月25日＝長期滞在の語学研修関係三グループ――語学教育振興会(COLTD)、語学教育協議会(ELEC)、日本女子大シェイクスピア・ドラマ・ゼミ――の計一二四名が昼食パーティで交歓。館長も英語入りスピーチ。外国人講師からはスペイン語、中国語のスピーチも飛び出す。日本女子大学生が英語劇「テンペスト」の一部を熱演。他のグループも仏、英両語の合唱など。

3月31日＝三つの青山学院大グループ七六名の交歓会。原豊、羽田三郎両教授のスピーチ。全員が青学大カレッジ・ソングを合唱。

ちなみに、51年度に行われた交歓会は合計二二回、延三、三四五人、一五一グループが参加し、一六大学二一名の教授がスピーチをされた。

▽……△

宿泊をともなう研修において、食事は重要な意味を持っている。楽しい会食は、有効な交わりの機会でもある。しかし、諸物価の高騰や食堂従業員、設備などの関係で、今まで必ずしも利用者の満足を得られない場合があった。

新しい年度を迎え、食費の値上げと共に、それだけの改善をしようと、食堂も力を入れており、4月に入ってからは、見違えるように質量共に向上し、「これならば、どこのレストランにも負けないよ」との声を耳にしている。

食堂の責任者は、次のような文を寄せ、一人でも多くの利用者に喜んでもらえる食堂に生まれかわろうと決意をあらたにしている。

「新年度からは、霞が関ビルの東海大学校友会館より小沼兄をチーフに迎え、調理部門を充実いたしました。出来るだけ加工食品や添加物を使わないで手づくりの味、本物の魅力を皆様に味わっていただきたいというのが私共の念願です。また、申込についても、追加などいつでもお受け出来ますのでご遠慮なさらずにお申しつけ下さい。誕生日や祝会などにふさわしいお料理もいろいろおすすめしたいと思います。とにかく、こ

●館長日記から――

◈5月の多摩の丘、目に映るものは緑一色である。十二年間に植えて下さった記念樹が大きく育ち、昔をいまに残す雑木林と交わり合って、明るい人工の自然をつくっている。まさに目に青葉の美しさである。◈3月29日、青山で正田理事長の葬儀に出席し、清心にして寡欲、公正無私の判断力、叡知に富む洞察力、温い心の人であった先生のご急逝を悲しく思った。痛恨いうべき言葉もない。葬儀場への往復を山内恭彦、増田四郎の両先生と同車した。20日の夜、悲しい第一報を知らせて下さったのは親友の急死に驚かれた山内先生であった。◈4月22日、東大百年の意味を問うティーチ・インに出席された久保亮五教授に正田先生追悼記念セミナーの企画をお願いした。無宗教葬だった先生を悼むにふさわしい学際セミナーを開いてその学徳を偲びたい。◈4月18日、キリスト教フレンド派の同信の友、鞍馬菊枝さんの訳書『クェーカーの信仰に生きた人々』の出版を祝うため十余名が国際文化会館に集った。高校英語教師を定年退職後、ここ十年は病患になやまされていたが、心血を注いでこの訳業を完成された。昭和42年から千人会員として、まさしく貧者の一灯を温い心で捧げつづけて下さる当ハウスの協力者でもある。4月16日付のキリスト新聞の書評で東京神学大教授大木英夫先生が「魂の底の響き」と題してすばらしい紹介をして下さった。◈5月5・6・7日の早朝、NHKラジオの人生読本で「新しい友情」を放送した。上代たの、加藤六美両先生から大いにおほめいただいたが、当ハウス関係の方々からも電話や手紙でご感想をいただいた。お勧めもあり、次号のニュース紙上で内容全文の記録をのせることにしたい。人生読本に登場するのは、老人の組に入ったことらしい。◈5月17日、坂田道太氏の出版と還暦を祝う会がホテルニューオータニで開かれる。防衛庁長官時代はともかく、文部大臣在任中は、当ハウスにも、ご来館下され、また経常費に国の補助金がつくように尽力下されたり、理解ある支持をよせられた。いわば教育のわかる政治家である。今後の大成を期待したい。◈4月8日、遠来荘の日本庭園が完了。ささやかな植込みであるが、小さな灯籠とつくばいが多摩の民家を茶室らしくしたようである。それにもまして裏山の雑木林が小さな庭を大きくしている。三百万円の開館十周年寄付のお蔭によるものである。感謝してご報告したい。◈5月7日、千人会員（警視庁勤務）江幡玲子さんから記念切手数十種数千枚に及ぶ貴重なプレゼントをいただく。手紙を書くときにお使い下さいとのご厚意は真に有難い。私は感動をかくし得ず合掌した。

こは各大学に開かれた、先生方や学生の皆さんのための場所です。母校の施設と同様に存分にご活用下さいますようお願いいたします。日頃、ご利用、ご指導、お励まし下さいます諸先生方には心よりお礼申し上げます。

食堂に関するご意見やご希望はどんなにささいな事でもけっこうですからお寄せ下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。」

（大学セミナー・ハウス食堂社長　酢屋善兀）

▼失火の第二セミナー室 改装して使用開始

2月14日夜半に失火のあった第二セミナー室（54・40㎡）の改修工事は、2月16日から延焼した内部の取り壊し作業が着手され、約二〇日間で完成した。室内は床と壁紙が青色で統一されている。

3月11日午後3時より改装なった第二セミナー室で完成披露パーティが行われ、館長と各課長、関係職員のほかに、U研究室、清水建設などの工事関係者と当日の宿泊グループ（神奈川大・小山ゼミ、東京学芸大・小林ゼミ、専修大・内田ゼミ）の三〇名が出席した。

なお、工事費に一九二万円、机、椅子などの備品に三七万五千円を要したが、工事費は火災保険で充当することができた。

×　×　×

●利用状況

＊＝同月2回利用

■2月

東京薬科大学教授　坪井　実
明治学院大学教授　畑井　義隆
明治大学講師　油井大三郎
東京大学教授　内田　祥哉
青山学院大学講師　寺東　寛治
津田塾大学講師　中里　明彦
中央大学通信教育課程
東京教育大学教授　松延　博
駒沢大学教授　阿部　肇一
武蔵工業大学講師　野崎　喜嗣
駒沢大学教授　中原　章吉
芝浦工業大学教授　十代田知三
津田塾大学ESSクラブ
早稲田大学教授　岡田　純一
日本大学商学部ゼミナール連合
立教大学聖書研究会
武蔵工業大学助教授　俵　信彦
武蔵大学教授　福本　久雄
東京大学教授　関　寛治
上智大学聖書研究会
明治学院大学教授　秋元　徹
早稲田大学教授　栗山　昭一
明治学院大学助教授　丸山　稔
早稲田大学韓国文化研究会
早稲田大学教授　西宮　輝明
中央大学教授　亀山　三郎
工学院大学助教授　横山　倉三
神奈川大学教授　小山吉之助
東京女子大学英語研究会
早稲田大学教授　町田　実
東京経済大学武蔵野風土記愛好会
東京大学助教授　＊見田　宗介
慶応義塾大学教授　石坂　巌
早稲田大学教授　新澤　雄一
明治大学教授　原　正彦
東京女子大シェイクスピア研究会
一橋大学小平祭実行委員会
法政大学教授　福岡　孝行
東京大学教授　利谷　信義
法政大学教授　安井　郁
東京工業大学助手　近江　政雄
東京大学教育学部学校論ゼミ
東京都立大学教授　清水　誠
東京都立大学助教授　鳴沢　実
東洋大学講師　丹野　朝栄
東京都立大学助教授　宮村　治雄
法政大学教授　下川　浩一
千葉商科大学助教授　松村　祝男
神奈川大学講師　橋本　侃
神奈川大学助教授　三浦　孝司
東京女子大学助教授　山島　成穂
電気通信大学助教授　狩野　紀昭
工学院大学教授　西野　治
東京学芸大学教授　阿部　猛
法政大学教授　大谷禎之介
東京学芸大学教授　林　勉
早稲田大学教授　高橋　磐郎
東京都立大学教授　金子ハルオ
東京工業大学教授　松田　武彦
東京学芸大学講師　城生伯太郎

●第13回大学教員懇談会記録「学歴と職業―『指定校』に関連して―」（昭和52年3月31日発行）を実費（五百円）でお頒けします。

ご希望の方は企画室まで。

慶応義塾大学英語会
芝浦工業大学教授　明野　徳夫
成蹊大学教授　川口　浩
東京薬科大学受験生＊
玉川大学教授　沼野　一男
独協大学教授　松嶋由紀子
千葉大学教授　井上　勝也
国学院大学教授　関野　昭一
市川きもの学院
日本学生経済ゼミナール
大丸
ダイワ精工
日本水産＊
郵政省貯金局
松下電器産業
アイホン
日本化薬
小西六写真工業
ADO通信教育スクーリング
ユービックス販売
ライオン油脂
日野協力会（日野自動車）
市光工業
【個人利用】
東京薬科大学研究生　塩味　陽子
日本女子大学教授　志賀　英

■3月

東京大学教養学部オリター会議
明治大学助教授　渡辺　昭夫
東京大学助教授　土屋　守章
横浜国立大学助教授　岡田　守弘
一橋大学教授　北原　勇
成蹊大学現代教育研究会
東京大学助教授　渡辺　昭夫
専修大学教授　内田　義彦
横浜国立大学教授　中西　信行
明治学院大学教授　新田　孝二
神奈川大学教授　小山吉之助
東京学芸大学教授　小林　弘
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
東京外国語大学教授　竹内与之助
一橋大学歴史科学研究会
中央大学教授　亀山　三郎
成蹊大学文化会
青山学院大学助教授　唐津　東流
東京学芸大学助教授　斉藤　耕二
東京薬科大学教授　川瀬　清
早稲田大学教授　大槻　義彦
明治大学文学部ゼミナール協議会
明治大学助教授　岩崎富久男
早稲田大学教授　示村悦二郎
国際基督教大学宗務委員会
法政大学教授　三浦　徳弘
都立大学助教授　慶谷　壽信
早稲田大学教授　田村　恭
東京学芸大学教授　阿部　猛
東京大学教授　芳賀　徹
東京薬科大命と暮しを守る研究会
東京学芸大学助教授　小町谷照彦
東京教育大学助教授　藤田　至則
慶応義塾大学教授　海老塚敏男
日本女子大学教授　徳末　愛子
駒沢大学教授　佐々木宏幹
東京経済大学教授　末岡　俊二
中央大学教授　吉村　二郎
共立女子大学文化系サークル
東京理科大学教授　大沢綱一郎
東京女子大法人事務局職員研修会
法政大学教授　大谷禎之助
専修大学教授　望月　清司
東京大学助教授　鈴木　博
明治大学教授　宮崎　繁樹
東京経済大学教授　色川　大吉
慶応義塾大学教授　常盤　政治
杉野女子大学教授　田村　皖司
玉川大学教授　門脇　朗示
和光大学講師　大津由紀雄
桜美林大学助手　大越　孝
立教大学三戸ゼミナール創立十五周年記念会
松本亨英語教育研究会
阿佐ケ谷教会
語学教育振興会
英語教育協議会
文学教育研究者集団
国立村山病院看護学校
すみれ幼稚園
仮説実験授業研究会
日本印刷技術協会
松下電器産業
西武百貨店
ダイワ精工
多摩中央信用金庫
大平電業
三井物産林業
西武百貨店
高島屋
日本化薬
郵政省簡易保険局
日本水産
市光工業
町田市役所
【個人利用】
中央大学教授　亀山　三郎
青山学院大学学生　有本　大輔

■編集後記

教養学部長としてご多忙な大森荘蔵先生から玉稿をいただき、巻頭を飾ることができました。紙面をかりて、先生のご協力に対し厚く御礼申し上げます。

本号では51年度の年間業務報告および共同セミナー白書を掲載しました。一年間の活動の実態を確認していただき、セミナー・ハウスが迎えた十二年という歴史の重みを感じとっていただければと思います。（能）

戦中と戦後の間
1936－1957

丸山真男　在学中の論文に始まる戦中の25篇と戦後の36篇を収録。特異な政治的・社会的環境での一貫した学問的営みを示す、想像力と思惟の比類ない結晶。　￥2000

維新の精神

藤田省三　有形文明としての富強に力を用い、普遍的文明の精神としての明治維新の名を風化させ虚偽意識化してきた近代日本の思想の歩みを、鋭く分析する。￥1100

夜と霧

V.E.フランクル　一心理学者によるアウシュヴィッツ収容所の体験記録。極限状況における、ダンテの地獄をも凌ぐ悲惨さと、人間の崇高さ。　霜山徳爾訳　￥1100

沈黙の世界

マックス・ピカート　言葉が騒音と化してしまった現代世界において、沈黙の存在の深みを説き、人びとを、より根源的なるものへ導こうとする。　佐野利勝訳　￥1200

生きがいについて

神谷美恵子　精神科医としてライ療養所にあった体験と、深い思索への沈潜から生れた書物。人生を模索しつつ生きる現代の若い人々におくる勇気と愛の名著。　￥900

精神科医のノート

笠原嘉　臨床医・研究者として第一線にある著者の、全体的理解をめざす深い眼差しと簡潔な文章によって描かれた、わが国の精神医学的風土の初のスケッチ。￥1200

野生の思考

レヴィ＝ストロース　〈野生の思考〉を未開人の思想とする幻想を解体させ、その具体論理を展開。戦後フランス思想に最大の転換をもたらした書。大橋保夫訳　￥3300

偶然と必然

J.モノー　現代生物学の最前線から生命の起原・生物の本質に迫る。伝統への挑戦としての革命的論理は世界の思想界に衝撃を与えた。　渡辺格・村上光彦訳　￥1000

東京文京本郷3
振東0－195132　みすず書房